

博士（保健学）学位論文要旨

論文題目

関節リウマチをもつ高齢者のストレンクスに関する研究－
「老年期のライフイベント」への適応にみられた「能力」－

Study of Strengths of Elderly Individuals with Rheumatoid Arthritis:
Competencies Identified as for Handling Life Events in Old Age

2015 年

指導教員 宮城 重二 教授

佐久川 政吉
SAKUGAWA Masayoshi

女子栄養大学

要 旨

〔研究背景と目的〕 高齢者は、衰退現象として、老化や病気に伴う身体機能低下がある一方で、成熟現象として、経験が蓄積され生きる知恵として発達する精神機能がある。近年、成熟現象を捉える概念として、ストレングスが注目されている。ストレングスがケアに導入されたのは 1970 年代であり、先行研究において、ストレングスの定義及び構成要素、事例研究はあるが、実証的に構造化した研究は見当たらず、理論構築が求められる。ストレングスを実証的に明らかにしていくためには、高齢者が記憶の中から想起しやすく、顕在化しやすい内容を設定する必要がある。そこで本研究では、「老年期のライフイベント」に着目し、その適応にみられた「能力」の構造化を試みた。「老年期のライフイベント」への適応は、高齢者が闘病生活で強化してきたと思われる精神機能としてのストレングスによってもたらされ、それは「老年期のライフイベント」への適応の記憶から語られることが期待される。

したがって本研究では、成人期に発症し、身体機能は寛解と増悪を繰り返しながら低下していくが、精神機能は維持されている関節リウマチ (RA と略) をもつ高齢者を選定した。RA 高齢者は疾患特性から長い闘病生活を通して精神機能を強化し、特に RA 女性高齢者は自らの闘病体験を語ることができ、老年期の英知で意味を見出し、それがストレングスになっていることが考えられる。

以上のことから、本研究では、RA 高齢者の「老年期のライフイベント」への適応にみられた「能力」の構造化からストレングスを明らかにすることとした。

〔対象及び方法〕 高齢者の「能力」の構造化を図るために、研究協力者全員に共通し、RA の影響が特徴的に現れることが予測された 3 つのライフイベント（「リウマチの発症」、「初めての手術」、「老年期のライフイベント」）を時系列に設定し、それらのライフイベントごとに、6 つの構成要素（個人：願望、能力、自信、環境：資源、社会関係、機会）について

検討する必要があると思われる。しかし本研究では、特に「老年期のライフイベント」を取り上げ、その適応における「能力」の構造化を試みた。

研究協力者は、在宅で生活し RA と診断された 65 歳以上の女性高齢者とした。まず A 県内の地域包括支援センター及び訪問看護ステーションに調査協力を依頼し、RA を発症後 10 年以上で手術経験があり、面接調査が可能な者を選定・紹介し同意の得られた 14 人であった。調査は自宅での 2～4 回の訪問面接調査によって、1 回 30～60 分で行った。調査内容は本人の了解を得て IC レコーダーに録音し逐語録を作成した。分析は逐語録を精読し、その中から「老年期のライフイベント」に関連すると思われる文章の塊を抜き出しエピソードを作った。次に、エピソードから文脈上読み取れる了解可能な最小単位の文章で、ストレングスと解釈できる内容をキーセンテンス(“ ”)とした。類似したキーセンテンスを集め、サブカテゴリー(< >)を見出した。さらに、サブカテゴリー化したものを類似内容ごとに集め、カテゴリー(《 》)、コアカテゴリー(【 】)を生成した。カテゴリーは、3つのコアカテゴリーとして生成された。真実性・妥当性の確保のため、学位(博士)を有し RA 高齢者への看護実践経験のある研究者 2 人と合意を得るまで検討し、恣意的な解釈がないかを確認しながら分析を進めた。

【結果及び考察】「老年期のライフイベント」への対処から見出された「能力」は、97 のキーセンテンス、26 のサブカテゴリー、13 のカテゴリーが抽出された。さらに、カテゴリーは、3つのコアカテゴリーとして生成された。RA 高齢者は、精神機能を活かし RA を《長患いの価値》として意味づけるという【病気の意味の探求】をしていた。この病気の意味の探究を礎に、個人(自己)に向き合う《自己覚知》と《しなやかさ》を発揮し、また、個人にとどまらず関わりのある環境(他者、サービス、病気)への《謝恩》ができる【受容】へと能力を向上させていた。

さらに、その集大成として、《根気》《跳ね返す力》《自己決定力》を踏まえた上で、環境に対して《言語化による自己表現》《臨機応変にセルフケア》《居心地よさの創出》として向き合いつつ、個人の力で限界の時は、環境の力を取り込むという《社会資源の獲得》をしていた。一方で、環境への働きかけとして、《世話上手》であり、《次世代の育成》まで担う利他的な能力を発揮していた。

RA 高齢者は、老年期に至るまでに脈々と培ってきた精神機能を生かし、RA という病気を探求する中で意味づけ、受容し、個人と環境との【相互依存】の形を生成できる能力を身につけ向上させている構造が導かれた。また、RA 高齢者は痛みと共存しながら身体感覚を研ぎ澄ませ、できることとできないことを区別し、折り合いをつける術を身につけてきたと思われる。そのため問題解決やニーズを満たすための他者への頼み方が巧みで、相互依存ができると考えられた。

【結語】「老年期のライフイベント」への適応から導かれた RA 高齢者の「能力」とは、自己の内面を掘り下げ【病気の意味の探究】としての価値を形成し、病気や環境（他者）との関係における【受容】へと広げることができ、他者との関係で培われる【相互依存】に至る高次の段階に到達していた。また、過去から現在、《次世代の育成》のように未来志向で捉えることのできることである。

RA 高齢者の「老年期のライフイベント」の適応にみられた「能力」の構造は、超高齢社会を迎え、高齢者、特に慢性疾患や要介護高齢者の「能力」を見出し、高齢者ケアにおいても、その応用可能性があると考えられる。